

『日本奥地紀行』における色彩

——イザベラ・バードの目に映った横浜～東京の色

JA日下

要旨：本稿は、イギリス出身の女性旅行家イザベラ・バードが1878年日本滞在中における自身の体験を記した旅行記『日本奥地紀行』で使用されている色彩語に着目することで、バードの景観認識の傾向を読み取る。その際、なかでも横浜から東京近郊の場面を特に考察対象としている。概して来日初期のバードは日本の風景を淡い色、あるいは灰色や青を基調とした色でとらえているが、そうした描写の中でもしばしば赤系統を中心とした色彩語を用いており、それがバードが「単調」と形容した日本の景観を描写する際に、風景の中に色鮮やかなフォーカルポイントを作り出している。さらには、ジャポニズムなどの当時西洋で流行していた芸術運動とその品々、もしくは当時の言説や思想からの影響が、風景や日本人の容姿に関する描写や記述に用いる色彩語の選択に影響を与えており、バードはときに色眼鏡をかけて日本を眺めていたこともあきらかになる。

Abstract: This article examines the use of colour-related words in Isabella L. Bird's *Unbeaten Tracks in Japan*, an account of this British-born woman traveller's own experiences during her stay in Japan in 1878. It analyses the patterns in Bird's perception of the Japanese landscape, with particular focus on scenes in Yokohama and Tokyo. Generally, her early depictions of the Japanese landscape are characterised by pale hues and shades of grey and blue. However, while doing so, she also frequently uses red-coloured terms or other similar bright tones, which serve to create focal points within the otherwise "monotonous" landscape. Furthermore, the influence of Western artistic movements, notably Japonism, and contemporary racial discourses in the West can be seen in her choice of colour terminology. This suggests that her portrayal of the landscape and the Japanese people was sometimes shaped by cultural and aesthetic preconceptions of the West.

はじめに

明治初期、西暦では一八七八年五月のこと。イギリス出身の女性旅行家イザベラ・バードが日本の横浜に到着した。以降、同年十二月に横浜から香港に向かう船に乗船し、日本を去るまでの半年余り、バードは東京の英国公使館を起点に当時の公使ハリー・パークスとハリーの妻で旅行家でもあったフアン・パークスの夫妻をはじめ、アーネスト・サトウやバジル・H・チェンバレンらの協力のもと、蝦夷のアイヌを訪れる長期の旅や、関西圏の伊勢神宮や京都などを巡る旅を通じて、開国後日本の目撃者の一人となった。来日前からバードは、すでに西洋にある程度知られていた開港都市や、京都、日光、鎌倉といった人気の観光地ではなく、西洋の人々がほとんど「足を踏み入れているいなかった (unbeaten)」とバードが主張する日本の「奥地」を旅すること、特にアイヌの人々と実際に会い、生活を観察することを日本滞在中の主要な目的としていた。同時に日本への旅行は、バードにとって「非英語圏との初めての出会いであり、異文化間の翻訳や誤解という複雑さへとつながる」体験でもあった (Williams and Clark 2)。⁹⁰ その旅は一八八〇年にイギリスのジョン・マレー社から *Unbeaten Tracks in Japan* と題された二巻本から成る旅行記として出版され、当時のイギリスで広く読まれる著作となった。日本では、同旅行記は『日本奥地紀行』という邦題で知られており、金坂清則による完訳をはじめ、これ

までいくつかの翻訳が出版されている。

『日本奥地紀行』を紐解くと、意外にもバードは初めて訪れた日本という地に興奮してはおらず、冷静に当時の日本を見つめ、ときに菌に布着せぬ率直かつシニカルな、ときに辛辣な批評を加えていることがわかる。なかでもバードはジョン・マレー社との手紙のやり取りの中で、日本の風景について「日本には魅力は感じていません。たいへん興味深く、真剣な研究対象にしたくはなるでしょうが、景色が単調 (monotonous) なのです」と形容してやめる (qtd. in Bird, *Letters to Henrietta* 205)。傍点は原文ではイタリック)。来日時に海上から見た日本の自然を「日本の沿岸部は大抵の海岸と比べるとずいぶんと趣があるものの、色彩や形状の面で取り立てて驚くような点は見当たらない」とも表現している (二二二)。⁹¹ これは日本で一九九〇年代から起こったイザベラ・バードブームの要因として、バードの著作の中に日本の西洋化以前の「原風景」を求め、そこに地方再生の起爆剤やナショナルイズムの要素を見出そうとした流れがあることを考慮すると、いささか期待を裏切られるといえる。たしかに、来日以前にバードが旅したハワイ(当時はサンドイッチ諸島と呼ばれていた)における火山の火口を目指した危険な遠出や、アメリカ合衆国のロッキー山脈麓での滞在時に身近に存在した雄大な自然や山々の連なりなどと比較すると、大自然の荒々しさを好んだバードからしてみれば、日本の風景を「単調」と形容した理由も頷ける。

その一方で、バードが「単調」という言葉で形容したものは色彩の単調さでもあった。一九世紀西洋に存在した、ピクチャレスクさをもって風光明媚かつ崇高で趣のある風景とする美の観念は、バードにとつても魅力的な風景の一つの基準になっており、事実「ピクチャレスク」という言葉は『日本奥地紀行』の中にしばしば登場する。たとえば、横浜に向かつて東京湾を北上する船の甲板から見えた日本の村々を「ピクチャレスクな灰色」と形容し(一:二七)、東京に向かう列車の中から見えた横浜近郊の景色を「時々急に目に飛び込んでくる木々の生えた丘や、小さなピクチャレスクの谷があつて美しい」とも記している(二:二八)。それ故、バードが日本の風景で特に惹かれたのは、日光東照宮の絢爛豪華な様であり、富士山の雄大さであり、そして浅草寺の色彩やかな建物・仏像や参道の喧騒、そしてそこを訪れる民衆の様子であった。逆にバードは、自身が感動しない景観、たとえば東京の街並みを「薄っぺらく、ピクチャレスクでもなく、やがては消えゆくもの、人々の喧騒を除けば取り立てて興味を惹くものはない」と酷評している(二:181)。

概してバードには日本の風景(ここでは自然の景観と人々の生活の様子)のどちらも指すを、「西洋化に浸食された近代の日本」や「西洋化以前の近代の日本」や「自然の風景の単調さ」や「街の人々の活気」のように二項対立的にとらえる傾向が見えてとれ、バードはいずれも場合も後者を評価している。それはバードの来日が、まさに日本に近代化の波が到来していた時代で

あり、訪日した「ヴィクトリア朝の旅行家たちに対して当然のごとく、近代性や伝統、美的な独自性、進歩史観について一連の関連した問題を提示した」時代だからである(Williams and Clark 6)。

本稿では、『日本奥地紀行』に使用されている色彩語に着目し、バードの目に映った日本およびバードの風景の捉え方を考察する。色彩関連の言葉に焦点を当てることは、バードが訪れた日本の各場所や場面においてとりわけ何に関心を寄せ、何が色彩的に記憶に残ったのかを理解する手がかりになる。そこには、バードの風景の捉え方のある種の傾向を読み取ることができるだけでなく、先入観に囚われずに客観的に風景を眺める観察者というよりも、ジャポニズムなどの当時西洋で流行していた芸術運動とその品々、もしくは当時の言説や思想の影響という、ときに色眼鏡をかけて日本を眺めていたこともあきらかになる。

イザベラ・バードとは

色の分析に入る前に、イザベラ・バードについて簡単に紹介したい。メアリー・キングズリーやマリアンヌ・ノースらと並んでヴィクトリア朝の女性旅行家として、当時そして現在なおその名が知られているイザベラ・ルーシー・バード(一八三一—一九〇四)は、イングランドのヨークシャー州ブラブリッジ

にて、英国国教会の牧師をしていたエドワード・バードとその妻ドーラ・ローソンとの間に長女として生まれた。家族構成としては父・母の他に妹のヘンリエッタがいた。イザベラはヘンリエッタを溺愛しており、病気がちであった妹と旅先での体験を共有すべく、ヘンリエッタ宛に旅先から頻繁に手紙を書いた。そうした手紙は、ヘンリエッタが知人に見せ、イザベラのことを共に語らうことを常としただけでなく、イザベラが旅行体験を本として出版する際の重要な資料にもなった。イザベラは父の赴任先が度々変更されたことで、イギリス国内でも住まいを転々とする生活を送り、決して一か所に留まるような生活を常とする人物ではなかった。その中でも、父の死後一八五九年に母・妹と共に移り住んだエジンバラでの生活とマル島トバモリーでの滞在は、イザベラのイギリス生活において比較的長く、あるいは足繁く通った場所になった。

イザベラは幼いころから、キリスト教に厳格な父親から宗教的教えを受け、自身も日曜学校で父を助けたりもした。乗馬を好み、父からは植物に関する知識も学び、景色を細部まで観察する目や距離や広さを目測する方法も養われたという (Soddart 10)。一方母からは絵を描くことなどを学んだ。また、イザベラは文学や生物学の素養を独学で身に付けた。こうした体験や学びは、のちに旅行家として世界各地を旅するようになった際、卓越した観察眼、旅行記の挿絵となった数々のスケッチ、そして馬での旅などに活かされることとなった。加えて、幼少期か

らキリスト教が身近にあったことは一方で積極的な慈善活動への従事、異文化で暮らす人々を場合によっては蔑むことなく観察する姿勢へと繋がるものであり、他方で人脈を得ることの大切さを知った生き方をしてきたことで、旅先での紹介状を手にして世界各地を旅行する待遇を得ることにもつながった (金坂、三十九頁)。

イザベラ・バードは大きく分けて二度来日している。一度目は先述の一八七八年における滞在であり、この滞在を記したものが『日本奥地紀行』である。二度目は一八九四―九七年にかけての朝鮮半島から中国を旅した際のもので、度々日本にも立ち寄り、長崎や関西圏だけでなく、東京、日光や伊香保などの保養地にも滞在し、一度目の来日で知り合った友人との再会を楽しんだことが知られている。とくに朝鮮での情勢悪化により (日清戦争)、一時的な避難場所として日本に滞在した。朝鮮半島での旅は旅行記『朝鮮紀行 (もしくは朝鮮奥地紀行)』にまとめられ、中国での旅は写真集『中国奥地紀行』として出版されているが、その一方で『日本奥地紀行』に記された日本に関する情報量と比較すると、これらの書物に記された同時期の日本滞在に関する記述はけっして多くない。

バードは、旅行家と聞いて一般的に想像されるような健康的で屈強な人物ではなかった。旅行中の精神面での不屈さはたしかにその通りであったといえるが、バードは普段から背椎の痛みを慢性的に抱え、精神的にもイギリスにいると鬱の症状がみ

られることが多かったという。また、身長も四フィート十一インチ(約一五〇センチメートル)とけっして恵まれた体格ではなかった。バードにとつての初めての海外への旅は二〇代の時で、北米での滞在であったが、そもそも海外旅行を始めた理由が、当時の病気の治療法として環境の変化のための海外旅行が存在し、一八五四年に医者のお勧めで海外旅行を決意したことにあった。バードの言葉を借りれば、「私は旅行が好きというわけではありません。最初に旅に出たのも健康のためでしたし、今なお旅に出るのも概してそれが理由なのです」(Fred B. McDams 486)。父親から必要なお金を借りての旅行で、結果としてバードは鬱病から解放され、自分に旅行が合っていることを発見する。以降、ハワイ諸島やロッキーマウンテンでの長期滞在を体験し、その数年後日本でのアイヌ訪問を中心とした「奥地紀行」、日本からイギリスへの帰国途中に香港を経て、マレー半島での旅行などをおこなった。そうした旅でバードは度々持病の背中の痛みに苦しむこともあり、また、気候風土的に気分がすぐれないこともあったが、ときに過酷な環境に身を置くことはバード自身の気質に合っていたらしく、自ら好んでこうした体験を求めていった。それらの体験はいずれも旅行記として出版された。当時旅行関連の出版社としての地位を確立していたジョン・マレー社から出版されたこともあり、バードは一躍有名旅行家となった。

一八八〇年の最愛の妹ヘンリエッタの死、そして翌年からの

ヘンリエッタの医師を務めていたビショップ氏との結婚期には(以降イザベラ・バードは「ビショップ夫人」の名で執筆活動をおこなった)、バードは単独での旅行を控えていた。しかし、五年間の結婚生活後に夫ビショップ氏が亡くなると、バードは医療関係の訓練を受けた後、再び旅行を再開する。チベット付近から中央アジア、中東に至る旅行が評価され、一八九二年にバードは女性で初めての王立地理学会の特別会員の一人に選ばれる。この頃からバードはイギリス各地での講演に忙しい日々を送っていたが、そのような中、一八九四年から前述の朝鮮・中国の旅を開始する。すでにバードは六〇歳を超えていた。最後の旅となったのが一九〇一年のモロッコでの旅であり、その数年後この世を去った。

文学と色彩研究

文学作品であれ、旅行記であれ、風景や人物を色を用いて描写することは広く見られる¹⁰⁾。にもかかわらず、著者の知る限り、文学や旅行記における色の記述に着目した研究は多くはない。そうした研究の例としては、上村和美による芥川龍之介の作品における色彩表現を論じた著書『文学作品にみる色彩表現分析——芥川龍之介作品への適用』、中津川ゆきによる芥川的小説と紫式部の『源氏物語』のそれぞれで使用されている日本語の赤系色彩語とシェイクスピア作品における英語の赤系色彩

語とを比較した論文、ステファノ・エヴァンジェリスタによるラファディオ・ハーンの著作における「藍色」をめぐる論文などを挙げるができるだろう。

『日本奥地紀行』における視覚や聴覚、触覚などの「感覚」に話を広げると、湯澤規子の「バードやモース（エドワード・モース）らの五感を通じて残された記録の史料の意義は、決して小さくない」という的確な指摘にもかかわらず、「音」に関する研究が存在するのみである（湯澤、八八頁）¹¹。内藤高による同研究は、バードとモースにとつての日本の「音」の捉え方の違いを考察した論文「騒音の文化——イザベラ・バードとエドワード・モースの聴く日本（一）」として紹介され、のちの同氏による著書『明治の音——西洋人が聴いた近代日本』にも収録されている。

作品あるいは著作の中から色の描写を選び出す作業はけっして容易ではない。その理由の一つに、色を含んだ言葉ではあるが、もはや本来の色の意味を失っている言葉の扱いがある。例えば「潔白」や「腹黒」といった言葉があるが、これは比喩的な意味での色の使用となっており、物理的な色彩に関する記述ではない。同様に、「目黒」や「本郷の赤門」といった地名や名所は、前者は色彩的な黒を想起させることは稀有であろうが、後者は今なお実際に赤という色との関連性が強く、そこには実際の色彩的特徴を含んでいる。また、『日本奥地紀行』にはバードが芝の増上寺境内にある徳川將軍家墓所を訪れた時の color

in summer and green in winter」という記述が登場するが、ここの green は「温暖な、温かい」という意味であり、色彩語として扱うことに対しておそらく多くの者が抵抗を感じるだろう（二四）。このように色に関する言葉と一言でいっても、見解が必ずしも一致しないものや判別が難しい言葉が存在する。そこで本稿では、上村および上村の研究方法を参考にして文学における色彩研究をおこなった中津川の判断に基本的に準拠することにする。中津川は上村による色彩表現の抽出基準を以下のようにとめた上で、そこにいくつかの独自の修正を加えている。

上村は、以下の基準で色彩表現を抽出している。まず、「血は赤」といった連想語彙は除外し、さらに、次の2つのタイプを除外した。1つは、表現形式を変えたと指示物が異なる場合で、例えば「白鳥」は「カモ目カモ科の水鳥」であるが、この語を「連体修飾用法」に置き換えると「白い鳥」になり、全身が白ければ白鳥だけでなく文鳥にも当てはまる。したがって「白鳥」の「白」は状況を記述する「白（しろ）」と同等には扱わない。除外した2つめは、色彩を感じることができないノイズであり、その例として「告白」が挙げられる。この結果、色彩を感じることができて、他の機能に置き換えても同一のもの、を指示するもののみを分析対象にしている。（中津川、九十一頁）

これに対して中津川は、「固有名詞」と「色彩語を用いた語であるが、色彩を示していない表現」の大半を分析対象から除外している。その際後者の例として「赤の他人」などを挙げているが、「赤子・赤児」と「赤帽」の二語のみは「語源が色彩の影響を受けているため」分析対象としたと述べている（中津川、百八頁）。

中津川が用いた基準の一つである連想語彙の除外について、たしかに材質が色を含意しうるかという問題はあろう。たとえば「木造の家屋」といえば多くの場合茶色が想起されるし、「石畳の河原」といえば、色に関する表現が用いられていなくても灰色から薄茶色の河原が想起される。とはいえ、材質を示した言葉色彩語として扱うことにはいくつかの問題が生じる。一つに、どのような色が想定されているのかが明示されていないため、色の描写としては曖昧かつ主観的になる。換言すれば、旅行記の著者と読者との間に色のコンセンサスが成立しづらい。たとえば、『日本奥地紀行』ではバードが日本語の通訳を採用する際、ジェームズ・C・ヘボンらの助力を借りつつ、複数の日本人との面接をおこなう場面が描かれているが、面接に来た日本人が「明るい色 (light-coloured) のツイード生地で、綺麗に仕立てられた欧州風のスーツ」を着ていたという描写がある（二七〇）。「明るい色」という色彩に関する表現が具体的に何色であるかを考えるうえで、「ツイード」はどのような種類の色が一般的かということが唯一の参考情報となるが、候補としていく

つかの色が存在するため、一つに絞ることは不可能である。別の例としては、バードが女性に身につけていた髪留めを「色鮮やかな (gay)」と形容しているが（二二〇）、髪留めには無数の色の候補が存在するのもちろんのこと、「色鮮やか」という表現について実際に何色であったかを判別する方法はない。こうした言葉の一部は、参考までに論文末尾の補遺の表には記載するが、後述の「表二」に示した数には含めないこととした。とはいえ、場面場面で色彩語が使われていないということは、別の見方をすれば、バードがその場面を主に色では認識していないということの証左にもなっている。

誤解がないようにあらかじめ述べておくが、本稿は『日本奥地紀行』に使用されている色彩語を、色彩学に基づいてバードが目にした建築物や風景、あるいは衣服の実際の色を特定することを目指すものではない。たしかに当時の視覚的資料（浮世絵、写真、絵葉書、水彩画、他の旅行記に掲載された色付きの挿絵等）や民俗学的資料（現存の衣服や日用品等）をてがかりに、『日本奥地紀行』に登場する色彩語と実際の色とを比較することは、ある程度可能であるように思われる。たとえば、バードが横浜上陸時に目撃した船乗りたちが身につけていた衣服の「青」が具体的に青系統のどの色であったのかを考察するといった具合である。しかし繰り返しになるが、それは本稿の主旨とは一致しない¹²。本稿は、色彩語に着目することで、バードが当時の日本の風景を主観的にとらえる際の傾向を明らかに

することだからである。いわば、「バードの目に」映った日本の景色を考察することにその主眼がある。後述のように、色に関するバードの言葉選びには、ジャポニズム等の影響が見てとれ、初来日したバードの目にはすでにある程度の文化的フィルターがかかっていたことが読み取れるのである。

対象となる箇所

本稿は『日本奥地紀行』における色彩語を抽出して一覧にまとめ、バードの景観認識や関心の的となった対象物に関する傾向を読み取る。同旅行記は、旅先から妹ヘンリエッタに送った手紙を出版のため編纂したという名目での書簡体作品の体裁をとっており、そのため各章の呼称が「第〇信」となっている（〇には数字が入る）。本稿では、手紙毎もしくは、「東京滞在中」や「横浜滞在中」といった都市や場所毎に色彩語をまとめ、そこで使用されている単語を色彩系統にまとめた表を作成した（表とは別に、色彩語と被修飾語の一覧を補遺として末尾に掲載）。その際、いくつかの条件をもとに絞った考察対象の選択をした。第一に、既述のようにバードの来日は一八七八年と、一八九四〜九七年の大きく二回に分けられるが、『日本奥地紀行』における色の描写に限定する¹³。第二に、扱う版を決定する必要があった。高畑美代子や金坂による研究の通り、『日本奥地紀行』（原著）には、バードの存命中に出版されたものとして大

きく分けて四種の版が存在する¹⁴。一八八〇年にジョン・マレー社から出版された初版は二巻本から成り、横浜から日光、会津、新潟を経て日本海側を陸路で北上し、津軽海峡を渡って函館に到着後、アイヌの村落に滞在した旅と、同年後半に神戸から大阪、伊勢、京都などを訪れた後再び横浜に戻るまでの関西の旅を含んでいる。同時期にニューヨークでもファクシミリ版が出版されており、これが二種類目に当たる。続いて一八八五年に、初版の内容を大幅に削って一巻にまとめ、より手軽に読むことを目的とした簡略版が、同じくジョン・マレー社から出版された。三種類目に当たる同著には旅程も横浜到着からアイヌ訪問までしか記されていないが、金坂が指摘するように、最初の邦訳は同書の翻訳であったため、長らくバードの日本旅行がこの旅程のみであったという誤解を生むことにもつながった（金坂、十六〜二十二頁）。また、バードは晩年に当たる一九〇〇年に、ジョージ・ニュートンズ版として、一八八〇年初版の内容に一部変更を加えたのみの一巻本としても出版しており、これが四種類目になる。ここではバードの日本滞在や当時の印象に関して四種類の版の中で最も情報が豊富な、初版本の内容が考察対象となる。

加えて、本稿は試論的位置づけにあるため、今回は『日本奥地紀行』の全章を考察対象とはしなかった。バードは西洋に既にある程度知られていた日本の都市や地域と、「西洋の人々がほとんど足を踏み入れていない」場所とを区別しているが、本

稿が対象としたのは、後者への旅を開始する以前にバードが訪れたり、滞在したりした都市や地域、つまり横浜から東京近郊の場面になる。バードは『日本奥地紀行』において同地域に計三回滞在している。具体的には、(一)最初の来日時(第一巻・第一信・第八信)、(二)函館から戻り、関西に向けて出発するまでの期間(第二巻・第四十九信・第五十信)、そして(三)関西から戻ってから日本を離れるまでの期間(第二巻・第五十九信)の三回であり、本稿はこれらの箇所すべてを考察対象とする。今回対象としなかった地域に関しては、別の機会に対象としたい。

『日本奥地紀行』における色の記述と考察

『日本奥地紀行』で使用されている色彩語を一覧にまとめるにあたって、二つの手順を取った。まず、登場する巻や章とその時にバードがいた場所と(例・横浜、東京行きの列車の中、浅草)、その場面で使用されている色彩語、そしてその色彩語が修飾している人物や物を一覧にまとめた。この一覧が補遺の表になる。続いて、一つ目の手順で作成した一覧を色彩の系統別(例・赤系統、青系統)に分類し、使用回数を表にした。これが下記の《表一》になる。系統の分類として、中津川による「白・黒・赤・緑・黄・青・茶・紫・桃色・橙・灰色」の十一の基本色彩語を採用したが(中津、九十頁)、追加として「淡い

色(paleなど)」の項目も設け、上記の基本色彩語とは別に数え上げた。表一で得られた情報を基に、バードが各場所や場面での景色をどの色を中心に認識し、その認識にどのような傾向が読み取れるかを考察した。考察にあたって、適宜一つ目の手順で得られた情報に言及し、考察内容に具体的な記述を含めるよう努めた。

色に着目することで、バードの風景の捉え方が見えてくる。それは、一方で背景を全体的にとらえ、他方で場面ごとに焦点となるモノや人物を意識するという、この二つの意識の使い分けである。バードは全体の雰囲気や「山の木々」や「空」の色でとらえ、その中に「富士山」や、大名屋敷の中でひとときを目立つ「旧井伊掃部頭江戸屋敷の赤い門」、浅草寺の御堂に置かれた四天王と邪鬼像の詳細な色の描写など、フォーカルポイントを作り出す。全体を一つもしくは二、三の色でとらえたのち、細部への描写として鮮明な色使いを足していくのである。

景色全体の描写には「薄い青」や「白」、「灰色」といった控えめな色を使用されており、その一方でフォーカルポイントとしてとりわけ「赤」に意識が集中しているのが特徴的といえる。赤系統の色彩語が用いられている例として、《表一》の浅草訪問時の浅草寺の朱色の建物や、東京滞在時の旧井伊掃部頭の大名家敷の門が赤かったことへの頻繁な言及が挙げられる。浅草寺はバードにとつてのお気に入りの場所の一つであり、好意をもつて眺める、強く意識された対象になっている。旧井伊掃部

表一

巻	場 所	白	黒	赤	緑	黄	青	茶	紫	桃色	橙	灰色	淡い色
第一巻	東京湾海上	6	0	2	2	0	5	1	0	0	0	10	9
	横浜	1	0	0	0	3	6	1	0	0	0	5	1
	東京行き列車の中	1	0	1	1	1	4	0	0	0	0	4	1
	東京	4	6	5	4	4	6	2	1	0	0	2	2
	横浜	1	3	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0
	東京（新富座／日本の芝居の説明）	7	2	4	0	1	0	0	0	0	0	0	0
	浅草、公使館、皇居	6	3	15	3	3	3	1	0	5	0	1	2
第二巻	東京に関する覚書	9	3	11	6	7	2	1	4	0	0	5	1
	芝、サトウ宅	6	5	8	2	7	3	2	0	1	0	3	0
	横浜港	1	0	0	0	1	1	0	1	0	0	0	0
	東京、横浜	0	0	3	0	0	0	0	1	0	0	1	0
合 計		42	22	49	18	29	30	8	7	6	0	31	16

注）灰色の枠は、各場所で多く使われている色彩語の上位二種類を示している。

頭の大名屋敷の門は、その言及の頻度から考えて東京滞在中バードの意識に強く印象を残した建物らしく、その理由はおそらくバードが滞在していた英国公使館の周辺に同屋敷があったためバードが目にする機会が多かったこと、そしてバードにとって東京の旧大名屋敷は灰色などの単調かつ地味な色の建物特徴的であった中、同屋敷の赤い門はひととき耳目を引くランドマーク的存在であったと考えられる。

バードの色に関する描写は、その時の天候やバード自身の気分によるところも大きい。来日した当日、東京湾を北上して横浜に到着するまでは霧がかかっていたこともあり、知人のいない日本での滞在への不安が「淡い、ぼやけた (pale)」という言葉の繰り返しに見て取ることができ、《表一》で示されているように来日初期は「灰色」系統や「淡い色」関連の色彩語が多く用いられている。来日当初旅の準備としてバードは四十通もの紹介状を携えて来日したことが知られているが (Stoddart 100)、バードにとって日本は初めての現地の言葉が分からない旅行であったのだから、その不安は想像に難くない。事実、横浜の様子を記述した一節で「ビクチャレスクさに欠けて」おり、「わけが分からず、死人のような顔をした」町と横浜の印象を語っており、バードにとって知人がいない不安や孤独感は、その心象風景がそのまま目に映る景色に投影され、「灰色の空、灰色の海、灰色の家、そして灰色の屋根。それらが一樣に単調に見える」と語っている (p.20)。逆に、ハリー・パークス夫妻が横浜

滞在中のバードを訪問したときの記述は、夫妻の人柄を絶賛し、「日の光のような陽気さと優しさを残していた」とさえ述べている(二二)。夫妻来訪後すぐにバードが日本で居心地の良さを感じるようになったというのではなく、横浜という町についての印象も「最初同様に素晴らしいとは思えない」という心情を吐露しているが、少なくとも夫妻のおかげで「すでに一人でやって来たことによる孤独感と、まったくの異邦人だという感覚は消えていた」と述べている(二三)。翌日横浜から新橋への鉄道に乗車したバードは、その日の晴天も好意的に作用し、「灰色」系統の色や「淡い色」関連の色彩語の使用が減少している。景色を「単調(dull/monotonous)」と形容することはその後も断続的に見られるものの、『表一』が示すように全体としての色彩的傾向として「淡い色」や「灰色」といった言葉の使用が減り、代わって「赤」「緑」「黄」といった系統の色彩語の使用頻度が増えている。これは、浅草寺の建築物の朱色など実際の赤を記したこともあるが、公使館や横浜のヘボン宅等で日本人の知人が増えるにつれてより快活な気分になったことや、そうした気分の変化のおかげで鮮やかな色に積極的意識が向くような心理状態になったと解釈することが可能であろう。

バードには日本の景色に関する色の描写よりも、日本人や中国人の服の色、髪や肌の色に焦点を当てた記述に字数を割く傾向もみてとれる。たとえば、横浜居留地の街並みに関する色の記述がない一方で、同地区滞在中にバードは主に「黒」という

色彩語を用いて中華系の人々が身につけていた服装を描写している。一方で、晩餐会などの場では、バードの色を用いた描写はしばしば出席している女性の服装に集中している¹³。その際、会場の室内の壁の色や照明の色、あるいは出された食事の食材の色などはほとんど語られず、女性の服装の色の描写が続く。前述の通り、バードの風景の捉え方には全体をある色でとらえたのち、細部への描写として鮮明な色使いを足していく傾向があるが、ひとたび人物の服装や外見に関する色を用いた詳細な描写が始まると、その場面では服装の描写に終始する傾向さえある¹⁴。

興味深いことに、女性や人力車の曳き手、あるいはバードが「サンパン」と呼んだ小舟の漕ぎ手といった日本人の服装について色彩語を用いた詳細な描写が目立つ一方で、バードが日本で知り合った西洋出身の人物の服装や外見に関する言及は少なく、色彩語の使用も稀である。たとえばバードがその邸宅に一週間滞在した横浜のヘボン夫妻の外見に関する描写は『日本奥地紀行』に無く、同様に東京見学でバードに同伴したチェンバレンらの服装等の記述も見当たらない。その一方で、バードはとくに日本人が西洋風の服を着ている時の体型との不釣り合いさを度々強調している。西洋出身の人物の服装や外見はイギリスの読者が興味を抱かない箇所と判断して旅行記に記さなかったのか、あるいはバードが興味関心の対象としなかったのか、あるいはバードの旅行記を英語で読める人々についてはプライ

バシーの観点から記述を控えたのか、その理由は推測の域を出ることはないが、いずれにせよ、『日本奥地紀行』では日本人や中国人の外見に關してしばしば色彩語を用いて詳細に描写しているのとは対照的である。

おそらくその傾向は、バードにとってのエキゾチックな関心の対象かどうかに関係している。日本の女性やサンパンの漕ぎ手や人力車の車夫の服装は、いずれも「異文化」的要素であり、それはバードにとっても旅行記の読者にとっても、自分とは異なる世界に属すると認識される。そして異文化・エキゾチックさについて考えることで、バードの色彩に關する一つの重要な傾向が見えてくる。この文脈でとりわけ關連する色は「黄」と「青」になる。『日本奥地紀行』を通じて、バードは日本人の肌の色を一貫して「黄色」と形容しており、『表一』で示されている「黄」系統の色の大半は日本人の肌の色に關する描写に登場する。アジア人の肌に関する言説の形成については、マイケル・キーヴァックの著書 *Becoming Yellow: A Short History of Racial Thinking* がある。キーヴァックは西洋においてアジア人の肌の色が一九世紀以前の旅行記ではしばしば「白」と表現されてきたことをまず指摘したうえで、西洋において分類学の誕生によって次第に、アジア人を「白」でも「黒」でもない「黄色い」肌をした人種とみなすカテゴリー化がなされていったこと、そしてそれが当時の「科学的裏付け」を通じて言説化していった過程を、とくに「モンゴロイド」という名称に着目しつつ丁寧

に追っている (Kevak)。バードが日本人を見たときに「黄色い肌」という表現を用いたことには「アジア人＝黄色人種」という一九世紀すでに西洋で浸透していた言説が、バードの視野にフィルターをかけていた可能性が高い。事実、バードは浅草訪問時の記述の中で日本の女性の容姿について「垂れ下がったモンゴロイド系の目をしている」という表現を用い、アイヌとの比較で日本人の容姿を説明する中でも「黄色い肌」であることと「モンゴロイド系の体型」であることを並列しており、特に後者の例ではキーヴァックが論じているアジア人に關する西洋の言説がバードの記述に見事なまでに当てはまる (1: 76, 274)。

一方、バードの視野にかかったもう一つのフィルターとしてジャポニズムからの影響も指摘できる。バードは新橋駅に到着した際に見た列車から降りていく日本人乗客の群れについて、「以前見たことがあるような感じがする。それほどまでに日本人は盆や扇子、茶器に描かれた姿に似ているのだ」と述べている (1: 20)。これはジャポニズムの作品や、日本から輸入された工芸品や博覧会等への出展品に描かれた日本人像を指しており、バードは既に頭の中にあった日本人に關する固定観念と實際に出会った日本人とを比較していたことがわかる。同傾向はバードの『朝鮮紀行』にも見られる。ステイヴ・クラークが指摘するように、同著でバードは日本の対馬の景色を「伝統的な日本の絵巻や漆器に由来する、美に關する視覚的モチーフを使って」描写することで、「朝鮮との美的感覚の差異を強調

しつる」(Clark, "Isabella Bird, Rudyard Kipling, 79)。クラークによれば、対馬の描写に紅葉、青や緑の松林、黄金に輝く竹などの「色彩的点描」的な記述が、釜山の茶色く、草木が枯れた丘と対照的に描かれており、後者の記述は日本の帝国主義の影におびえる朝鮮の様子を表現しつる (Clark, "Isabella Bird, Rudyard Kipling," 79)。また、クラークはロレンス・ウィリアムズと共著の論文の中でも、バードによる日光の風景の描写に関する解釈として、「上から下への視線の動き、精密で詳細なイメージ同士が互いに関連することなく用いられている語りの技法には、風景を描いた中国や日本の絵巻物の視覚的特徴が見て取れるといえるかもしれない」とも述べている (Williams and Clark 10)。

とすれば、『日本奥地紀行』を「イメージや先入観で書かれたものではなく」と評した意見は再考を要することになるだろう (湯澤、八七頁)。それどころか、バードの視野にはしばしば固定観念の再現として日本人が映っていたといえる。これを裏付けるものとして、二つの事例を指摘できるだろう。第一に、バードは『日本奥地紀行』の中で日本人の背丈の低さにたびたび言及しているが、日本人を「人形」のようであると表現している。バード自身がけっして背の高い人物ではなかったことは既に述べたが、バード自身の背丈と比べて同じくらい日本人を「背が低い」「人形のように」と述べていることには、その比較基準として西洋人全般が意識されていたことが考えられるだけ

でなく、アジアを矮小化するオリエンタリズム的眼差しが見て取れる。

もっともジェニー・ホルトは、バードによる日本の人物や街並みの矮小化と実際以上に自身を大きく見せている記述を「オリエンタリズム的な植民地主義の力の誇示」と解釈できる可能性にはふれつつも、バードにとつて日本が小さく見えたさらなる可能性を複数挙げている (Holt 48)。一つに、バード自身が神経衰弱を患っていたことがあり、もう一つに日本の美術品などで独特な遠近法が用いられており、バードが日本に来る前からそれに馴染みがあったからであり、別の可能性として当時西洋では馴染みのない不可思議な存在との遭遇を視覚的な歪みと結びつける傾向があったこと、またバードが植物学への関心から顕微鏡で観察することを好んだことなどがある (Holt 59)。ホルトによれば、『日本奥地紀行』にはヴィクトリア朝の神経科医が「神経機能不全」と呼んだ症状にバードが苦しんでいたことが見てとれ (Holt 49)、さらには浮世絵などの日本の絵画には人物の大きさを誇張したり逆に矮小化したりする、視点を歪める画法が伝統的にあつたとして、歌川広重による浮世絵「平清盛怪異を見る図」などをその例として挙げ、日本における人物の矮小化を怪異や不思議さと結びつけ、さらには精神病とも結びつける考えが西洋に存在していた (Holt 54)。とくに後者はバードの日本を見る眼差しに日本の芸術の影響を読み取っている点で、本論と関連性を持つといえる。

バードが日本の景色を観察する際に固定観念の影響があったことを裏付ける第二の事柄として、エドワード・モースも『日本その日その日』の中で、同じく東京や横浜での日本人の肌の色に言及している箇所が数カ所あるが、バードとは対照的にモースは日本人の肌を「黄色」とは書いていない。モースは「黒く量の多い頭髮」や「白い歯」といった日本人の外見に関する記述に加えて (Morse : 43)、日本人全般については「より色黒な肌」と述べ、人力車の車夫については「お天道様に絶えず照らされて褐色に日焼けした肌」や「着色された提灯の光に照らされて」(……)輝く褐色の体はほとんど赤に見えていた」といった言葉で形容している (Morse : 43, 58, 109)。モースがバード同様に「ピクチャレスク」という言葉を用いて日本の風景を眺める場面はたしかに散見されるものの (Morse : 47, 109)、そこには科学者としての事実を記そうとするモースの姿勢が読み取れるということもおそらくできるだろう¹⁸⁾。

ステファノ・エヴァンジェリスタは、論文“Symphonies in Haze and Blue: Lafcadio Hearn and the Colours of Japan”の中で、ラファディオ・ハーンの著書とりわけ『日本の面影』の中で、ハーンが日本の文化や景色を「ぼやけた色 (haze)」や「青(あるいは藍色)」でとらえようとしたと論じている。エヴァンジェリスタは、日本文化に特徴的な色の一つとして、ハーンが淡い色といったはつきりしない色、あるいは日本を霧や霞で表象していると述べているが、それはハーンが「日本の芸術や風景の

美しさ」が西洋の読者にとって究極的には翻訳不可能である」と考えたため感覚に訴えた記述を目指したことに起因すると論じる (Evangelista 74)。そうした傾向をハーンの日本の怪異への興味・関心と結び付ける一方で、そこに葛飾北斎らに代表される浮世絵における藍色の多用がハーンの日本に関する色彩的理解に影響を及ぼしていると結論付けている。さらには浮世絵に使用された顔料が、十八世紀末すでにヨーロッパからの輸入品であったこと(いわゆる「プロイセンの青」)にも着目し、ハーンにとつての日本の色とはそもそも文化のハイブリッドであったことも指摘している。

エヴァンジェリスタの鋭い指摘によれば、一八九〇年代西洋読者を対象とした日本の風景に関するハーンの色彩的認識は「一八七〇年代から八〇年代にかけてジャポニズムによって形成されていた、日本についての視覚的教養」を利用したものである (Evangelista 83)。ハーンが注目した「日本の青」が、バードとはほぼ同時期に横浜の通りを徘徊したときに目にした人々の衣服の色でもあったことは興味深い。来日間もない頃のバードの『日本奥地紀行』に登場する色彩語をあらためて見てみると、空や海の色、遠くに見える山並みの色、さらにはサンパンの漕ぎ手たちが身につけた藍染の服など、来日間もないバードもまた日本の色の基調をばやけた色や青、あるいはその組み合わせとしてとらえていたことがわかる。

おわりに

明治初期の日本に滞在した人々の日記や旅行記を紐解くと、そこには聴覚・味覚・嗅覚などの五感を総動員して日本という異国の文化をとらえようとした痕跡を見出すことができる。視覚もそうした五感の一つであり、本稿は色に着目することでイザベラ・バードが日本、とくに東京から横浜周辺の事物や人々をどのように認識したかを考察した。バードはかならずしも先入観のない真っ白のキャンバスに見たモノの色を一つ一つ置いていったわけではなく、その傾向はとりわけ来日間もない頃のバードの目が日本の風景を認識する際顕著である。ジャボニズムや日本に関する言説がバードの視野にある程度のフィルタをかけており、さらには色の描写をおこなう対象物とおこなわない対象物（あるいは記述そのものを省略している物）とを選択していたこともわかる。概して来日初期のバードは日本の自然の風景を淡い色、灰色、青を基調とした色でとらえているが、これがバードに日本の景色は「単調」と言わしめた理由の一つだったのであろう。その単調さの中でも、バードはしばしば明るい色に着目した風景描写をおこなっている。その際バードは赤を中心とした色彩語を用いることが多く、東京湾に浮かべられた船の船体に「トリリーティー・ポイント (Treaty Point)」と赤く書かれた文字、旧井伊掃部頭江戸屋敷の赤い門、浅草寺の朱色の建築物の数々、パーティーで日本人女性が身につけて

いた桃色や藤色の服など、バードにとって単調な日本の景観にフォーカルポイントを作り出していったのは主に赤系統の色であった。日本でのバードの関心事は、ときに色彩語の代わりに、詳細な統計データや衛生面への言及などの記述に表れてもいるが、赤という色がバードにとって日本の記憶に残る色の一つであったことはおそらく間違いない。

バードにとって日本の風景として強く印象に残り、敬意の対象とさえなつたのは富士山であった。バードは『日本奥地紀行』の中で富士山に何度も言及しているが、挿絵に關しても冒頭と末尾に富士山を描いたスケッチを一枚ずつ掲載している。一つ目はその円錐形に突出した山頂があまりにも特徴的な富士山を海上から目撃した際に描いたというスケッチであり、後者は時間を経て見慣れた富士山を東海道の村の一つから眺めた様子を描いたものである。とくに前者に關してはその異様な形からいくつかの考察がなされてきた。たとえば、挿絵にはモデルがあったという意見（白幡、三十三〜三十四頁）、ロッキーマウンテンのロングズピークを重ね合わせた心象風景として解釈すべきという意見（金坂、二百六十三〜二百六十五頁）、あるいは、日本を初めて目にした者が語る際の紋切り型の富士山への言及であり、バードの描写はエレン・ウォルワースがバード来日の前年出版した旅行記の記述に酷似しているとの指摘もある (Williams and Clark)。²⁶ 加えて、ハリー・パークスの前任者の元英国公使ラザフォード・オールコックが著書『大君の都——幕末日本

滞在記」に掲載した箱根から見た富士山を描いた水彩画は、バードの一つ目の富士山の山頂の形に近いものがあると指摘することもできるかもしれない。

真相が明らかになることはおそらくないであろうが、本稿で言えることとして、バードにとって富士山は日本の景色のフォーカルポイントの一つとなっていた。海上から初めて目にしたバードにとっての富士山の印象は「とても淡い青色の空を背景」にした「真つ白な雪を頂きに被った」姿であり、「麓は薄い灰色の霧」で覆われていた(1:13)。この描写は「淡い色／灰色」で日本の景色をとらえたうえで、それを背景に富士山をフォーカルポイントとして認識するバードの景色の捉え方がよく表れた記述である。しかし、『日本奥地紀行』の第二巻になるとバードは富士山が天候、季節や時間帯ごとに様々な色に見えることにふれ、「雪色」、「薔薇色」、「紫色」になると述べる(2:198)。そして同頁下では、快晴の日の夕暮れ時に浅草から見た富士山が、「澄んだパールグリーン」の空に「赤みがかった紫色」の巨大な姿を見せた体験を記し、富士山を「東京の素晴らしい見所の一つ」や「けっして見飽きることがない」と絶賛している。バードは富士山を「魅力的な個性そのもの」と呼び、「単なる物質的な進歩からくる単調さや品性に欠けた雑音から解放してくれる」ものとさえ表現している。その後関西に向けて出発した際の横浜港からもバードは海の「青」やデッキの「白」に言及しつつ、「黄金色の空を背景に孤高にそびえる」冠雪した「紫

色」の富士山を眺めており(3:22)、日本を後にする香港行きの船から見た富士山も日の出の中、「紫色」の森林の上にそびえ、「赤」に染まっていた(3:30)。バードの目に映った日本の景色の中で富士山が、周囲の景色を背景にフォーカルポイントとしての存在感を増すとともに、記憶に残る色も赤になっていった(同時に、周囲の景色にも明るい色の形容詞が使われるようになっていく)。そして、葛飾北斎の『富嶽三十六景』の一つ「凱風快晴」、別名「赤富士」がそこに想起されるのはおそらく私だけではないであろう。

註

1 アイヌ訪問は日本におけるバードの旅の重要な目的の一つであった。ジョン・L・ヘネシーは論文の中で、十九世紀西洋におけるアイヌへの関心高まりとその背景を説明した上で、明治時代にアイヌを訪れたバードも含めた三人の西洋出身の人物が記した旅行記について比較考察をおこなっている(Hennessy)。また、バードがアイヌに関心を抱いた可能性として、大野純子は以下のように論じている。

その頃、ヨーロッパ、特にドイツではP・F・v・シーボルトを中心とする「アイヌ＝白人説」を信奉する研究者グループがあった。「アイヌは白人の先祖だ」と信じる人類学者らは、この説を実証するためアイヌの頭蓋骨を調べ、

一八六五年には英国領事館員による遺骨盗難事件まで起こしている。バードはこれらの件を知っていた(三百五十三頁)。

当時の西洋の知識人がアイヌに関心を寄せていた理由に加えて、牧師の娘として新潟と函館にある宣教拠点の慰問を希望したことを挙げる研究者もいる(井戸、百四十四頁)。

2 本稿において原文が英語の場合、引用文はすべて著者による翻訳である。

3 以下、特に指定がない場合、(巻数・頁数)で示された情報はすべてBird, *Unbeaten Tracks in Japan* からの引用とする。

4 日本におけるイザベラ・バードへの関心の高まりに関しては、アンドリュース・エリオットによる研究がある(Elliott)。

5 ジュリア・クーエンとポール・スメサーズによれば、「西洋の旅行記の語りにおいて『見る』に重きが置かれるようになったのは十八世紀の、ピクチャレスクさや科学に基づく経験主義に始まり、『帝国のまなざし』の著者メアリー・ルイズ・ブラットの重要な指摘にあるとおり、それは十九世紀の帝国のまなざし(Imperial gaze)を通じて今なお続いている」(Kuehn and Smethurst)。

6 バードの人物像については主に以下の文献を参照している: Barr; Checkland; Middleton; Stoddart。

7 一九九〇年代から女性旅行家に関する研究が盛んになり、多くの著書が出版されるようになっていくが、その理由としてクレメン・セニカは一九七〇年代からのフェミニズム運動の流れの中でインテレクチュアル・ヒストリーへの女性の貢献を認める動きと、新しいニース市市場の開拓を模索する出版業界の思惑があったことの二点に言及している(Senica 227)。

8 より正確には、イザベラとヘンリエッタの間に、夭折した弟エドワードがいた(Stoddart 8)。

9 日本滞在に関しても、同じくジョン・マレー社から著作を発表していたチャールズ・ダーウィンから様々な助言を受けたうえで来日であった。

10 近年はチャールズ・フォースデイクによる視覚障害者が記した旅行記の分析など、障害者の感覚を考察した研究も出てきている(Lordick)。本稿はこうした研究の重要性を理解しており、研究動向に異議を唱えるものではない。

11 明治初期に日本に滞在した人物による、『日本奥地紀行』以外の著作における音の研究としては、勝海舟の三男梅太郎と結婚したことも知られるクララ・ホイットニーが記した『クララの明治日記』における雅楽に関する描写を考察した、曽我芳枝による研究などがある。

12 その一方で、明治初期の日本においてバードが目撃した実際の風景にはどのような色があったかは重要な点である。バードによる色の描写は実際に見た風景にあった色と対応関係にあり、たとえば訪れた都市に緑が多く、赤い色の物がほとんどなければ、その場所を緑を基調として描写することはある意味自然の行為となる。一八七八年当時の日本の風景にあった色を知る手がかりとして写真が現在も残っている有力な資料の一つになるが、一部を除いて当時の写真の多くは白黒であった。白黒写真を参考に実際の色を解明する技術としてAIの活用が考えられる。それは本稿の研究範囲外になるが、今後のバード研究の一環として取り組みたい。

13 ただし、一八九四年からの東アジアでの旅に関して井戸桂子が提示する興味深い見解を紹介しておきたい。

- 英国にとってアジアは挑戦すべき地であるが、イザベラにとって、日本はアジアの中では見知った地すなわち英国側の場所、中国の奥地や朝鮮が未踏の地である。日本はヨーロッパとアジア、すなわち西洋人から見た文明と未開の境目に当たる。この文明と未開の接点にあたる「日本」に立ち寄り、東京では慈善活動の一環として孤児院の設立に携わり、旧知のサトウ公使と情報交換をする。そして日本の中の自然の地、伊香保と日光湯元温泉で休養し、日光と中禅寺湖畔では外国人避暑地での交流のひと時を楽しむ。挑戦の日々に対して文明と癒しの日々という非常に微妙なバランスを、アジアの中の「日本」あるいは「日光」で保っている(百五十五〜五十六頁)。
- 14 金坂は原著の版をニューヨーク版を除いた三種類に分類している(金坂、十六〜一〇頁)。

- 15 同様の傾向はバードの他の旅行記にも見とれる。例えば『朝鮮紀行』では、当時の李氏朝鮮王妃閔妃にバードが謁見した際、王妃の服装や装飾品に関する詳細な描写が色彩語を伴ってなされている(*Bird, Korea and Her Neighbor* 252-53)。

- 16 ファラ・ガデリとヒマン・ヘイダリは、バードが旅行記の中で人物の外見の描写にかなりの字数を割いていると指摘し、それが旅行記における女性性を示す印であると述べる一方で、自身の勇敢さを示す逸話を盛り込んだり、現地に関する豊富な知識を記述したりすることで、従来男性の領域とされてきた旅や探検に関するジェンダー的社会通念に揺らぎを与えてもいると論じている(*Chaderi and Heidari* 45-56)。

- 17 バードの伝記作家の一人であるアンナ・M・スタダートも、バードにとっての朝鮮と日本の景色の対比について類似の見

解を述べている。スタダートが生前のバードから直接聞いた話やバードとジョン・マレーとの間に交わされた手紙の内容によれば、日本の「鮮やかな色彩、多様な植生、ピクチャレスクな建物に比べると、朝鮮の茶色く剥き出しの丘は陰鬱で人を寄せ付けない」雰囲気があり、一八七八年の日本旅行の際にバードが日本の風景に対して用いた「単調」という単語を、今度は朝鮮の景観について用いている(*Stodart* 276)。その一方で、スタダートはこの対比があくまでバードにとっての朝鮮に対する第一印象に過ぎなかったとも述べている(*Stodart* 276-77)。

- 18 ただしモースも日本人を矮小化している。たとえば『日本その日その日』には、商店について「沢山の子どもがおままじことをしているような印象を受ける」と表現した記述がある(*Morse* 1: 15)。

- 19 バードにとっての日本の景色とは少し文脈が異なるが、バードを含む東南アジアを旅した旅行家三名を扱ったマリ・ノエル・ングの研究書 *Three Exotic Views of Southeast Asia* では、バードのマレー半島旅行記が考察されている。同書でングは、バードによるアジアの文化を見つめる眼差しが、旅行以前からのバードの体験や価値観、とりわけイギリス社会の貧困層に対する慈善活動の影響を受け、予め形作られていたと指摘し、旅行記は必然的に記す者の文化や社会背景の産物であると論じている(Ng)。

- 20 ただし、クラークは別の論文で来日時のバードの富士山の描写を「慣例となっていた来日の場面を巧妙にパロディ化したもの」と説明している(Clark, “A Study rather than a Rapture” 18)。

参考文献

- Barr, Par. *A Curious Life for a Lady: The Story of Isabella Bird*. Faber and Faber, 1970.
- Bird, Isabella. *Unbeaten Tracks in Japan: An Account of Travels in the Interior, Including Visits to the Aborigines of Yezo and the Shrine of Nikkō and Ise*. 1880. 2 vols. Cambridge UP, 2010.
- . *Korea and Her Neighbors: A Narrative of Travel, with an Account of the Recent Vicissitudes and Present Position of the Country*. Fleming H. Revell Company, 1898.
- . *Letters to Henrietta*. Edited by Kay Chubbuck, John Murray, 2002.
- Checkland, Olive. *Isabella Bird and A Woman's Right to Do What She Can Do Well*. Scottish Cultural P, 1996.
- Clark, Steve. "A Study rather than a Rapture: Isabella Bird on Japan." *New Directions in Travel Writing Studies*, edited by Julia Kuehn and Paul Smethurst, Palgrave Macmillan, 2015, pp. 17–34.
- . "Isabella Bird, Rudyard Kipling, and the 'Bandobast' of East Asian Travel." *Studies in Travel Writing*, vol. 21, no. 1, 2017, pp. 76–91, DOI: 10.1080/13645145.2017.1303919.
- Elliott, Andrew. "A Perspective Close to Our Own: Footsteps Travel and the Japanese Reception of Isabella Bird's *Unbeaten Tracks in Japan*, 1996–2016." *Studies in Travel Writing*, vol. 21, no. 1, 2017, pp. 92–107, DOI: 10.1080/13645145.2017.1298209.
- Evangelista, Stefano. "Symphonies in Haze and Blue: Latacido Hearn and the Colours of Japan." *The Colours of the Past in Victorian England*, edited by Charlotte Ribeyrol, Peter Lang, 2016, pp. 71–94.
- Forsdick, Charles. "Travel Writing, Disability, Blindness: Venturing beyond Visual Geographies." *New Directions in Travel Writing Studies*, edited by Julia Kuehn and Paul Smethurst, Palgrave Macmillan, 2015, pp. 113–28.
- Hennessey, John L. "The Recurring 'Discovery' of Hokkaido and the Ainu: Three Decades of Nineteenth-century British Travelogues." *Nineteenth-Century Contexts*, vol. 45, no. 3, 2023, pp. 253–70, DOI: 10.1080/08905495.2023.2200129.
- Holt, Jenny. "Distressed Micropopia: Size Distortion and Psychological Disturbance in Isabella Bird's *Unbeaten Tracks* and in Subsequent Travel Writing on Japan, 1880–1900." *Studies in Travel Writing*, vol. 21, no. 1, 2017, pp. 47–62, DOI: 10.1080/13645145.2017.1298208.
- 井口桂子「日光を訪ねた二人のイギリス女性——イザベラ・バーナムとフリー・マクスウェル——」『駒沢女子大学研究紀要』第十九号「二〇一二年」百三十九～五十九頁。
- 金坂清則「イザベラ・バーナム日本の旅」平凡社新書「二〇一四年」。
- Keekav, Michael. *Becoming Yellow: A Short History of Racial Thinking*. Princeton UP, 2011.
- Kuehn, Julia, and Paul Smethurst. "Introduction." *New Directions in Travel Writing Studies*, edited by Julia Kuehn and Paul Smethurst, Palgrave Macmillan, 2015, pp. 1–13.
- McAdams, Elizabeth. "Isabella Bird and Japonisme Travel Writing: Common Interests." *English Literature in Transition, 1880–1920*, vol. 57, no. 4, 2014, pp. 480–96.
- Middleton, Dorothy. *Victorian Lady Travellers*. Academy Chicago Publishers, 1965.
- Morse, Edward S. *Japan Day by Day, 1877, 1878–79, 1882–83*. 2

vols, Houghton Mifflin Company, 1917.

内藤高「明治の音——西洋人が聴いた近代日本」中公新書、二〇〇五年。

中津川ゆき「色彩語「あか」の研究——赤・紅・茜・丹・朱・緋とred, scarlet, vermillion, crimson——」『東京女子大学言語文化研究』第三〇号、二〇一一年、八九～百十六頁。

Ng, Maria Noëlle. *Three Exotic Views of Southeast Asia: The Travel Narratives of Isabella Bird, Max Dauthendey, and Ai Wu, 1850–1930*. Eastbridge Books, 2002.

大野純子「レディ・トラベラー イザベラ・バードの成長と軌跡——“Unbeaten Tracks in Japan”出版前後まで——」『大正大学研究紀要』第百巻、二〇一五年、三百四十二～五十八頁。

Senica, Klemen. “Following in the Footsteps of Isabella Bird: Alma Karlin and Her Representations of Japan.” *Asian Studies*, vol. 9, no. 3, 2021, pp. 225–57, DOI: 10.4312/as.2021.9.3.225–257.

白幡洋三郎「碧眼富岳三十六景（その四）——矢り富士、平ら富士」『日文研』第一〇号、一九九四年、三十二～三十八頁。

曾我芳枝「『クララの明治日記』に見る日本文化——「雅楽」を中心として——」『東京女子大学比較文化研究所紀要』第七二巻、二〇一一年、十七～三十頁。

Stoddart, Anna M. *The Life of Isabella Bird*. 1906. Cambridge UP, 2011.

高畑美代子「イザベラ・バードの生前に出版された *Unbeaten Tracks in Japan* の四種の版における違い——思考・行動の変化を反映した改訂——」『弘前大学大学院地域社会研究科年報』第七号、二〇一〇年、百十五～四十五頁。

Williams, Laurence, and Steve Clark. “Isabella Bird, Victorian Globalism, and *Unbeaten Tracks in Japan* (1880).” *Studies in Travel Writing*, vol. 21, no. 1, 2017, pp. 1–16, DOI: 10.1080/13645145.2017.1301793.

湯澤規子「近代日本の記録史料としての『完訳 日本輿地紀行』——イザベラ・バード再読の意義——」『農業史研究』第四九号、二〇一五年、八五～八九頁。

補遺

手紙(第○信)	場所	色彩語	被修飾語
第一巻			
I	東京湾付近	grey	その日の天候
		a little faint blue	空
		gray	村々
		bright with the greeness of English lawns	田圃
		pale	海岸と海
		unpainted wood	小舟の船体
		pure white	小舟の帆
		white	漁船の帆
		grayness and dumness	辺りの雰囲気
		pure snow	富士山
		very pale blue	空
		pale grey	霧
		pale	霧
		grey	雲
		bluish	空
		white	漁船の帆
		pale, wan, and ghastly	辺り一面
		forest-crested	丘
		(picturesque) grey	村々
		pale blue	山並み
		red	船体に書かれた Treaty Point 文字
		pale blue	東京湾の海水
		white	漁船の帆
		grey	家々
		(monotonous) grey	屋根
		red/white	日本の軍艦が掲げている日の 丸の旗
		pale grey	陸地
	横浜	wooden bolts and copper cleets	サンパン (小舟の一種)
		blue	綿の服
		blue	綿の頬かむり
		very yellow	水夫の肌
		blue	税関役人の西洋風の服
		velvet/lacquered/ decorated/polished brass/ gaudily painted with contorted dragons, etc	人力車
		blue	車夫の脚絆

		blue	車夫の上着
		white	上着に描かれた家紋や文字
		yellow	車夫の顔
		grey	空
		grey	海
		grey	家々
		grey	屋根
II		fair	ハリー・パークスの髪
		blue	ハリー・パークスの眼
		blur	日本の雰囲気
III	東京に向かう 列車の車内	red	一等車の座席
	車内からの眺め	fresh green	景色全体
		faint blue	遠くに見える山並み
		blue	霧
		clear blue	東京湾の波
		white	無数の漁船の帆
		grey	木造の家屋
		grey	藁ぶき屋根
		grey	寺
		blue	右手に見える海と左手に見える街道
		grey	家々
		yellow	日本人
	皇居周辺	deep green	内堀の水
		red	旧井伊家の江戸屋敷の門
		black	公使館勤務の中国人の帽子
		blue	同中国人の服
IV		grey	霧
		black	排水溝
		bright	女性の外見
		blackened	歯
		yellow	人力車を覆う油紙
		stoned-faced	レンガ
		red (brick)	庭を囲った塀
		(painted) white	官公庁や西洋風の建物
		light green	吹上御所の竹
		dark (background)	コニファー
		dull blues, greys, and browns	庶民の服装（着物）
		white	足袋
		white	羽織の家紋

		touches of scarlet	子供の衣服の一部
		black	眼
		blackened	歯
		violet	中国人官僚の錦の服
		primrose	錦のスカート
V		chestnut	ファニー・パークスのボニー
		red	増上寺の徳川將軍家墓所の門
		gold and colour	金が用いられた、着色された唐草模様
		coloured	回廊
		white	畳
		pale, pea-green	熟したイチゴ
		blue	カキツバタと蓮
		iridescent	蠅
		blue and scarlet	トンボ
		black and gold	蝶の羽
		blue-green	蓮の葉
		azure	(引用文に登場する) 小川
VI	横浜	black	中国人の靴
		black	髪紐
		black	帽子
		very yellow	中国人の顔
		light-coloured	面接に来た日本人の背広
		white	同日本人のシャツ
		gilt	懷中時計の鎖
VII	東京(新富座 ／日本の芝居 の説明)	black	黒子の衣装
		coloured	提灯
		pure white	劇場の内装に使用されている木材
		white	天井に使用されている木材
		black	黒子の衣装
		white	劇場ののぼり旗
		red	のぼり旗に描かれた役者の家紋
		red and white	提灯
		pure white	幕
		red	幕に描かれた劇場の紋章
		white/red	観客に配布された扇
		yellow	役者の顔
		white	役者が衣装として身につけていた手袋
VIII	浅草	highly-coloured	仁王像

		lacquered in dull red	屋根の梁
		rich dull red	境内への門
		red	境内への門
		red	仁王像 (あ像)
		green	仁王像 (うん像)
		dull red	本堂
		grey	屋根の瓦
		black	お齒黒の女性
		red (wood colour)	おびんずるの色が禿げた場所
		richly coloured	寺の建物の一つ
		much red (lacquer)	五重塔
		gilded	お稲荷さんの像
		white	(神道の)御幣の木の棒の部分
		rich red (lacquer)	境内にある石の床の建物の一つ の中心にある回転する部屋
		black (lacquer)	部屋が上に載っているフレーム
		golden	四天王の一人
		bright red	同上
		bright pink	四天王が踏んでいる邪鬼
		emerald green	別の四天王
		sea-green	上記の四天王に踏まれている 邪鬼
		indigo blue	さらに別の四天王
		sky-blue	その四天王に踏まれている邪 鬼
		bright pink	四人目の四天王
		flesh-coloured	その四天王の足元の邪鬼
		straw-coloured	お茶
		red, blue, and white	矢についている羽
		red	射的屋に置かれた座布団
		Albino	神馬
		pink	神馬の目と鼻
		red-hot	絵画に描かれた火の車
		blackening	お齒黒
		red	郵便の車
	公使館、皇居	scarlet	晩餐会で見た皇后の服
		dove-coloured	西郷隆盛の妻の服
		pale pink	首や袖から少し見えた下着
		dove-coloured	帯
		pale pink	帯のデザインの花柄
		reddish-yellow	口紅
		pearl	肌につける白い粉

第二巻			
XLIX	東京	bright and sunny	台風一過の日
		brilliant green	お堀の土手
Notes on Tokiyo		white	コンクリートの建物
		grey	屋根
		green	勾配になっている土地
		white	船の帆
		blue	東京湾
		green(ery)	草原
		grey	上記の草原で所々見えた箇所
		grey	遠くに見える家の屋根
		blue	東京湾
		green	お堀の水
		green(ness)	お堀周辺の芝生
		dull red	旧井伊家の江戸屋敷の門
		white plaster	大名屋敷の上の階の壁
		black or dark-coloured	同屋敷の下の方の壁
		dull red	旧井伊家の江戸屋敷の門
		gold(-leaf)	大名屋敷の障子
		grey	家々
		white	菓子屋にあった、穂状花序が 付いた45センチほどの白い 団子の看板*
		crimson	口紅
		red	お店ののれんか旗
		red	干物屋の売り物
		black, red, and gold	日本ではなく、海外の町 (Canton) の街灯やサイン
		black	どぶ
		white	近代建築の建物
		greys, velvety-browns, and dull reds	明治以前の日本建築
		white	木造の近代建築のコーティン グのペンキ
		white	同上
		the loveliest colours	カキツバタ
		delightfully harmonised colours	菊人形
		gold-coloured	菊
		red, yellow, and white	菊人形の衣装
		(snow), rosy, purple, gold	富士山と周囲の空
		pure, pale green	快晴の空

		ruddy purple	富士山
		pure vermillion	緑に入った縞のライン
		rose-colour	雲海
		molten gold	お堀の水
		purple	日没時の富士山
		coloured	提灯
L	東京	dull brown	雲
		(stagnant) brown	霧
		blackened	書物についたカビ
	芝	blue	中国人官僚の絹の服
		gold	上記の服の刺繍
		amber	ネックレス
		white	帽子
		crimson	帽子のふち
		dark	女性が着ていた絹の着物
		black and gold	漆塗りの椅子
		black and gold	書物が置いてある机
		black	召使の服
		white	ネクタイ
	サトウ宅	greenish grey	家の壁のしっくい
		rich, quiet-coloured	ソファ
		gold	笙の笛の装飾
		silver	笙の笛を留めてある輪っか
		gold	笙の笛に付いている漆塗りの丸い、息をふきこむ部分
		whitened	楽団の一人のおしろい
		vermillion	下唇の口紅
		bronze green	着物
		scarlet splashed with gold	薄手の織物
		rich silver	帯
		white	足袋
		scarlet	頭のお団子を結ぶときの紐
		pink	べっ甲のヘアピンの端についているサンゴ
		dark blue	着物
		dark blue brocaded with silver	おび
		dark (silk)	着物と羽織
		rich striped (silk)	着物
		scarlet	おび
		scarlet	髪結いの紐
		gay	ヘアピン

『日本奥地紀行』における色彩

		white	顔のおしろい
		reddened	下唇の口紅
		white (silk)	着物
		scarlet	袴
		gold	笙の笛の装飾
LIX	横浜港	blue	海
		white	広島丸のデッキ
		golden	空
		violet	富士山の山頂
	火葬場へ向かう道、東京郊外	red	つばき
		grey	(イギリスの) 冬空
	お寺に到着	red	お寺に沢山置いてある売り物の骨壺とさえばし
		dark colour	お寺の壁のしっくい
	ヴォルガ号で日本を去る	reddening	富士山
		violet	根岸湾沿いの森林

* 原文は「菓子屋にあった、とげの付いた45センチほどの球状の物体」といった意味の記述だが、イザベラ・バード『完訳 日本奥地紀行4』（金坂清則訳、平凡社、2013年）の28頁および訳注98（247頁）を参考にした。